

砂の花

石原慎太郎





砂の花

定価 310 円

昭和四十年五月十一日 印刷
昭和四十年五月十五日 発行

著 者 石原慎太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社新潮社

電話東京(260)一一一一(大代)
振替 東京八〇八番

(乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします)

砂

の

花

不毛なものは結局時代ではなしに、
私たち人間です——スタイン——

三日つづいて雨が降っていた。この前までであった蒼く高い空は嘘だったように、今日も一日灰色の空が薄れて陽が覗くこともなく、間もなく夜だった。

人々はどうやらこれで冬だと言っていた。彰子は劇場の近くの喫茶店で彼を待っていた。五時半と約束した時間は過ぎようとしている。しかし彼女は石垣が多分三十分は遅れてやって来るのを知っている。

周りにはこんな天気にかかわらず、気ぜわし気な表情で誰かを待っている若い男や女が何人もいた。待っていた相手が現われると彼らはそのまま急いで立ち上って出ていくか、或いはやっと落着いた表情でお茶を飲み出す。

見るともなし、周囲を眺めながら、彰子の心は別段どう

とも動かなかった。そんな自分に気づき直し、彰子は自分が魚の入った大きな水槽の底の隅にじっと沈んでいる魚のように想える。

石垣を待ちながら気もせない。もはやせいてする話ではない。しかしいずれにしろしなくてはならぬことに変わりはない。が、待っている間だけでもそのことは忘れていた方が気鬱でなさそうだ。

喫茶店の広い窓ガラスに顔を寄せるようにして外を眺めると、室内の騒音が背のずっと後の方に感じられる。

辺りが段々暗くなり、通りに並んだ劇場のネオンの明るさが増すと雨足が前よりも光ってはつきり見えて来る。雨はなにもかもを濡らして冷たく光らせ、歩道の街路樹にやっと残っている枯葉までが光って見えた。

窓に寄せている頬の辺りのガラスが肌のいきりで白く曇り、離すとまたたちまちにあせて消える。外の雨の冷たさがわかる。確かに、もう冬は足音をたてて近づいていた。

彰子は五日前、友人の葉子とこの店の、多分今と同じテーブルで、彼女がこれから石垣に話そうとしていることについて交した会話を思い出す。

その時には、まだことがはっきり決ってはいなかったし、葉子は友だちとして大袈裟に彰子に同情し、彼女のために

憤慨もした。彰子はそれを半分はいい気持で聞いていたのだ。確かに、石垣とのことについて、彰子は今まで誰とも話さずにすぎた。もっと早く誰かに相談すれば、もっと早く別の勇気をもて、気持も決っていたかも知れない。

それに葉子とあったあの時外は素晴らしい天気だった。同じ舞台の主演の女優が近くの楽屋口から出て、かけ持ちのテレビスタジオへジャガーの幌を下させて通っていったのを彼女は窓から眺めていた。あんな日、あんな空の下では誰もがどんなことにも希望が持てそうだった。

そして今は暗く冷たい雨が降っている。天候の相違だけでも彼女の胸の中は暗示されそうだった。

窓から眺めた向いの劇場の入り口は空いてい、前を通りすぎる人々は雨具を身につけながらも背を丸め何かに向って急いで見えた。

傘も持たず、レインコートも着ない若い男が劇場の玄関の張り出した屋根の下に走り込んで来、雨に濡れた長い髪を拭き上げ、たてていた衿のしずくを払うと今やって来た方角の空をゆっくりと見上げ、やがてあきらめたように今度は雨の中へ歩いて出ていく。その横顔は周りの明りのせいか馬鹿に蒼白く見えた。当然だろうが、誰も彼に傘をさし出すものもない。彰子は彼の背が暗がりの中に消えて

いくまで見送っていた。

ふと、彼を含めて外を歩いている人間が今夜は誰もみなひどく不幸なような気がする。彰子は訳もなく一人でそう信じた。

ふり返って壁にかかった時計を見る。彼が現われるだろう六時にはまだ間がある。

彰子は考え、葉子へ電話しに立ち上る。葉子は多分五日前と同じように彼女をそそのかすだろう。が、葉子にそう言われなくても、彰子の気持は決っている。彼女は自分でそれを知りながら、それでもなんとはなし空いていた電話の受話器を外し、ダイヤルを回した。

雨ふりのせい、受話器は冷たく、それでいてべたついていた。

相手は話し中だった。彼女の置いた受話器をすぐ横からのびた手をとった。そのはずみに天邪鬼にも、テールへ戻りかかった彰子に葉子との電話がまた急に必要なものに思えた。

電話が空くのを待ちながら彰子は立っていた。受話器をとったのは若い男だ。男はダイヤルを回し、何か二言三言話し、相手の長い返事を頷いて聞きながらちよっとまぶしげな、しかしぶしつけない視線で眼の前の彰子を見渡す。

土曜のソワレのために、彰子はマチネの化粧の塗りを落し切っていない。濃く引いた眼の隈の辺りを、男は詮索するような眼で見つめ、彼女が見返すと眼を伏せ今度ははきものを眺める。

電話は間もなく空いたが、二度掛け直してみても相手は話し中だった。

今し方の男の代りに、横のレジスターの女が同じような眼で彼女を見ていた。大柄な、髪を染めた女は、彰子と殆んど変らないくらい化粧をしている。支払いする若い男の客に微笑いもせず釣りの硬貨をさし出す彼女は苦労して作り上げた自分の化粧具合を充分意識している。そんな化粧をしなくても眼元ははっきりして魅力があったが、鼻と唇がなんとなく下品だった。

三度かけ直しての電話から無駄になった硬貨をとり出す彰子を、レジスターの女は舞台の女優と知って品定めするような眼でもう一度眺め直す。彰子は厭な気持ちになり電話をあきらめて踵を返した。

飲みかけのカップと雑誌を残して来たテーブルに見知らぬ男が坐っていた。

咎めた眼で見かかる彰子へ、男は抜けて読んでいた夕刊を下し、

「お連れがいらっしゃるんですか。いらしたらたちます、満員なもので、まだおいでにならないようでしたらコーヒー一杯だけ飲ましてください」

頷く彰子に、気になるらしい何か夕刊の記事に急いで眼を通すと油気ない長い髪を癖のように掻き上げた手で、運ばれてあるコーヒースプーンをとった。

年の頃四十はいつている、坐っているながら大柄な、というより痩せて背高い。浅黒い顔の肌、眉と眼の色が濃かった。

男はかき混ぜたカップを口に運ぶ前、もう一度念を押すように微笑って見せる。その微笑が年に似ず若々しく爽やかに見えた。

見直して見た相手の印象が悪くなかったのに彰子は満足した。外見だけでいえば彼女の好きなタイプだ。そう思いながら石垣を待っている自分に気づき可笑しくなり、彰子は一人でまた微笑った。

気づいたように見返し、

「舞台の方ですね。上の、西川さんのですか」

彰子の出ている芝居の演出家の名前をいう。

問うように頷く彰子へ、

「僕もちょっと芝居の方に——」

言つて後は微笑つた。

そのまま、まだ熱そうなカップを空けると、

「お約束通りコーヒ一杯で。お邪魔さま」

男は立ち上つた。

時計は六時だった。

石垣の姿と一緒に、出ていった男を窓の外に追つて捜して見たが、両方とも見つからなかった。

彰子は肩をすくめ、残つていたカップをあけた。

たった今の相手の印象は良かった。そして彰子は氣にしたように今の男の年齢を想像しかけて止めた。彼女が待つている石垣とそんなに違いもしまい。そんな詮索は何故だか彼女を虚しくしそうな氣がする。

手にしたものを置き、代りに煙草に火をつけかかった時石垣が入つて来た。

入り口で中の彰子を確かめて見、微笑つて見せた後、濡れた傘の水を切っている。その背は雨の中と同じようにかがんで丸まっていた。

傘を預け、レインコートの前だけ外すと彼はやって来、迎える彰子を見返しながらはにかんだように笑う。

その笑顔で想い出したように、彰子はこの用件で約束よりも三十分も待たされたことの焦だたしさを初めて感じて

いた。彼と一緒にいるといつもそうだ。

「確か、連れが坐つていたんじゃないのか」

ぼそりといい、今と同じように笑いかけるが、その眼の内に、一瞬だけ真面目な光がある。

彰子は焦だつて、というよりうんざりした氣持でそれを見返した。入つて来た時の笑顔も、半分はそのことを言うためのものだ。多分、窓際の彰子とあの男を石垣は外から眺め来たのだろう。

「なにをいつてるの。あなたが遅れて来たから、満員の客に割り込まれたのよ」

石垣は答えずただ同じように笑い返す。

また一瞬、彰子は五日前葉子に打ち明けたように石垣という男がつかめなくなりそうな氣がする。今夜こうして逢うために用意して来た言葉が結局みんな役だたないような氣がし、不安だった。

彰子は、前に一度今と同じことで彼と話した時を思い出そうと思った。が出来なかった。なんだか、今までに同じことを何度もくり返して来たような氣がするのだが。

そして今度もまたそれと同じような結果になつてしまうような。

彼のためにウエイトレスはなかなかやって来なかった。

二人はまず黙ったままでそれを待った。

やがてやって来たウエイトレスに彼は彰子と同じものを頼み、それが持つて来られるのを二人はまた同じようにして待った。それが来てしまえば、後はこのテーブルで二人だけの世界を作れるとも言うように。

注文したものが運ばれても、二人はまだ黙ったきりである。眼の前の彰子をうかがうような表情で、石垣はゆっくりカップの中身を飲んだ。

彰子はそれでもまだ待つように彼から眼をそらし窓の外を眺めた。雨は同じように降りつづいて、夜は彰子があることについて話し合うのにふさわしいように濡れて冷えて冷えと見えた。

彰子は話し出す糸口の言葉を探していた。言うべきことについては知っていながら、それをどう、なんと言い出したらいのかということに彼女にはわからぬに知らずにいたのだ。

結局、またはにかなだような微笑で、

「で——」

と彼が訊いた。それは、このことを訊ねるのに余りに短い間だった。

「そうよ」

彰子は同じように短く言った。

「矢っ張り」

「そうよ。矢っ張りよ」

「それで、どうするの」

「それはあなたが決めることよ」

「僕が」

「そう。ただこのことだけについてではなくってよ。この前あなたがなんと言ってああさせたかは忘れたわ。忘れたことにするわ。でも、そこなわれるのは私の体よ。わかるでしょ」

「そんなことは、わかっている」

うつ向いて言った。

見つめながら彰子にはふと、眼の前にいる石垣が、実際はこのことがらに何の関係もなかったような気がして来る。

「わかっているなら考えて。あなたが私のことをどう思っているか知らないけれど」

「そんなことは言わなくてもわかっている筈じゃないか」

「いいの、それはそれで。でもよ、あなた以上に、私は私が可愛いわ」

「うん」

素直に頷いて見せた。

「矢っ張り不安だわ。何の当てもなく同じことをくり返していくの。年齢にも、体にも限度があるわ。わかつて」

「わかる。でも、当てがないといつても、保土ヶ谷に家だつて建てるじゃないか」

「家は、そりゃ建つでしよう。でも誰だつてその中に住めるわよ」

言つた彰子を、石垣は眼を上げまじまじと見つめた。その眼は咎めていると言うより、驚いて見える。軽い後悔が彰子の胸の内に触れて過ぎる。その感触に動きかかる自分を彰子はやつと封じこんだ。

「前島君が、君にそう言えと言つたのか」

石垣は彼女が五日前、葉子と会つたのを知っている。

「誰が。私自身がそう言うのよ。言いたいなのよ。私だつて切羽詰つたわ」

言いながら彰子は自分の言葉に厭な気がした。しかしそんな気になるのが自分の甘さだと思おうとした。

「切羽詰つた」

石垣は漠然とくり返す。

「結局女にしかわかりはしないのよ。でも、矢っ張りあなたにもわかつてほしいの」

「わかるよ」

「わかつていないわよ」

「それじゃあ——」

「だから選んでよ。いいえ、私に選ばせて。今なら私、思ひ切れることが出来るわ。私だけじゃなし、お互いに。ね、思ひ切れるでしよう。どうするかを今選びましょう。その機会だわ」

彰子の眼を覗いた後石垣は眼を落し、眉をひそめたまま黙つてテーブルを見つめている。その表情が彼にとって決して大袈裟ではないことは彰子にもわかる。石垣が本気で何かを考える時、時たま、そんな表情になる。大抵の時、彼はあのはにかんだ笑顔だけを見せた。いつか、映画館で記録フィルムを編集した大戦の記録映画を見た後、彰子の前にしながら長い間彼はそんな表情でいた。その時、彰子は初めて彼のそんな顔を見たのだが。その時の表情の意味を彰子はこの頃になって知つて来た。その時はただ一緒にいてひどく気鬱だった。

しかし今は、ただ気鬱だけではすまされない。視線を返さぬ石垣の顔を彰子は問いつめるように見守つていた。

しながら、彼が今考え込んでしまったことに、ふとあつた気ないような気持もする。

別れてもいい、と言った彼女を頭から否まず考え込んで
いる彼は、彼もまた、いや、彼の方が彼女よりも二人の潮
時についてとうに考えていたのかもしれない。

「考えてよ、今が機会だわ」

重ねて言ってみた。

「そんなこと、考えるまでもないじゃないか」

こらえていたものを、むきになってぶつけるように彼は
言った。

「保土ヶ谷の家だって君がいなけりゃ作りゃしない。た
だ——」

「ただなんなの。家、家って言わないで。私そんなものね
だったりしなかったわ。住むのならどこでもいい。今の私
か、あなたのアパートだっていいわ」

「君にはわからない」

「何が。わからないわ、だからわからせてよ。私、実際に
自分があなたに必要なのかどうか、今それが知りたいの」

「必要だ」

同じように眉をひそめたままその時だけ小さい声だが、
きっぱりと石垣は言った。

しかし、何故かその言葉はそんな表情で言われるとかえ
って嘘のように感じられる。

要するに彰子は、これと同じ会話を今までに幾度かくり
返したような気がするのだ。

そして、

「僕には、なんだか、自信がないんだ」

いつかのように、また石垣は言った。

「なんの自信がいるの。誰も完全な自信があって結婚した
りしないわ」

「君にはわからない。君にはわからないんだ」

声はうめくようにも聞こえた。彰子はそれを今日の天候
のせいにしてしようとした。それは作りものの声のようにも聞
こえた。

「だから、なにがわからないのよ？」

落していた眼を上げ、やっと彰子を見返す。その視線は
女々しくさえ見える。

「君と一緒にいること、君を迎えて引き上げるために、僕
あ、段々周りから自分の自信を固めていきたいんだ」

「それが私にはわからないのよ。それは確かにあなたの以
前が普通の人とは違っていることはわかるわ。でも、同じ
人だっている筈でしょう。戦争から生きのびて帰って来た
人はあなただけじゃないわ。あなたが言うことのために、
一体どれだけの時間がかかるの。私はいつまで待たなけれ

ばならないの」

石垣は、まごついたような眼で見返す。そんな彼の眼を迎えながら、何故か彰子の胸の内から、自分が今彼との別れ話を持ち出しているという実感が薄れていくのだ。

彼女はまたわからなくなる。いや、結局自分がまだどうにも、石垣という男を捉えていないことがわかって来る。

彰子が今夜、こんな話をする気になったのは、二度目の妊娠というきっかけがありこそしたが、彼という男を今になっても捉え切れぬ焦りと不安がそうさせたのだ。

と同時に、それが彼女を今日まで石垣に繋いで来たのかもしれない。

「私、あなたがいつも何を考えているかがわからないのよ。この私についても。結局あなたは私にも何も話してくれなかったわ。でも、私がそれを知りたいと思うことは許されていい筈でしょう」

ゆっくり彼は頷く。

「私、自分がこんな女だからあなたには全部なにもかも開けっぴろげて向って来たわ。でも、結局あなたは本当に私の中に入って来ていないんだわ。少なくとも私はあなたの中に入らなかった」

「そんなことはない」

「いえ、そうよ」

何か言い返すかと思ったが、それきり石垣は黙ったまま飲みかけのカップをいつまでも見つめている。

彰子が促すように身じろいだ時、

「僕には、君が必要なんだ」

ゆっくりと、それだけ言った。しかし彰子はそれを、少なくとも今日は、遠い感慨で聞いていた。今まで何度ものこんな会話があり、その末に同じ言葉のくり返しがあったような気がする。

他の男と別れ話をしたことは今までに何度かあった。しかし、相手の男のせい、或いは彰子の気性か、話は大概一度ですんだ。

そんな話をこんな具合に曖昧にいじくり回しながら堂々巡りするのには相手の石垣のせい、或いは知らず彼に順応して来た彰子のせいなのか。

どちらかを選んど言おうと心に決めながら、その実彰子は彼と本当に別れることは考えていなかったような気がするのだ。

石垣とは葉子の働いているバーで初めて会った。かけだしのバレエダンサーの葉子が小遣い稼ぎに通っている銀座

の小さなバーへ、ある頃、体の空いていた彰子は誘われるまま半ばの好奇心で手伝いにいったことがある。岐阜で精神病院を経営している実家から、かけだしの舞台女優の働きではまかなえぬ生活費は月々仕送りしてもらっていてそんなアルバイトの必要はなかったが、丁度その時の彼女には自分の気持の隙間を埋める何かにぎやかな雰囲気が必要だった。

つまり、平たくいえば失恋のうさばらしだった。彰子は失恋と思っているが、相手の男はどんなつもりだったかは知らない。

男役で囑望されていた宝塚を、先っ走りで粗こつともいえる彼女の気性から、一度見た新劇に熱を上げて飛び出し、元の振り出しで女優の卵に戻って苦労していた頃、手伝いのわんさにかり出されていったオペラの舞台で舞台監督だった大滝と知り合い、なんとなく馬が合っている内に気づいたら彼にのぼせていた。

宝塚ならぬ、大学の美学を同じように途中で飛び出してその道に入っている大滝の熱っぽい口調が、同じ熱にうかされまだ僅かの後悔ももたずにいた頃の彰子には福音のように聞こえたのだ。

互いにどうとも話を切り出さぬうちに二人は月に半々相

手のアパートで暮すようになった。無駄だから片方がどっちかに移ろうと彰子が言おうと思った頃、大滝はラスベガスを振り出しに欧米を回ると言う日本の芸能団に雇われ、二つ返事で日本を発ってしまったのだ。彼が残した言葉は、「多分、二年さきには帰る」、とだけだった。

結末があつた気なく、彰子には大滝を喪ったという実感が殆んど湧かなかつた。自分がそのことをどんなふうに受けとめたらいいのかもわからない。

友人の葉子に打ち明けた時、

「なんだかあんたらしいわね。けどその程度ですんだのならかえっていいじゃない。いつまでも気にしてちゃ駄目よ」
彼女は言った。

日がたつにつれ、自分を置いていった大滝を、というより、葉子にそんなふうに扱われた自分に腹がたつた。

気晴しのバー勤めは彼女の性に合い、客がおごらなければ自腹でその日の給料の足まで出して飲み、よく酔っては騒いだ。客だか女給だかわからぬそんな彰子は店で人氣があった。

そんなある夜、彰子は葉子の客だった石垣に引き合わされた。引き合わされたというより、騒いでいる彰子たちの横で一人陰気に坐り込んでいる石垣が気になって葉子に質

したのだ。

「彰子さんがあなたのこと気にしているわよ」

葉子に呼ばれ石垣は例のはにかんだような笑い方で、それでもいわれるままこぼまらずにたつて席を移して来た。しかし、彰子や葉子が話しかけなければ相変らず黙りこくったまま同じだった。

そんな葉子は、よく見れば、陰気というより退屈そうで、わざわざそんな場所に来てまで退屈そうというよりは、どこか年に似ずぼけているようにも見えた。

それかあらぬか、

「この人、未だに戦争ぼけなのよ」

紹介した葉子はいった。いわれた石垣は同じようにただ笑っただけだ。

男出入り、というか一線を越えた男友だちを沢山持つて適当に利用している葉子に、二人の仲の気安さで、石垣が葉子にとってどんな仲の知り合いなのか訊ねたことがある。

葉子は鼻の頭に皺を寄せて馬鹿にしたように笑い、肩をすくめ、

「冗談じゃないわよ。私、あの人見てるといいいじして来るの」

と言った。

しかし石垣は殆んど毎夜店に現われ、カウンターの隅へ同じようにして坐っている。葉子は無視していたが、彰子は初めの頃二人の間に過去一度か二度の關係があり、石垣はそれに魅かれて通つて来るのだと思つた。

が、次第にそれが思い違いなのがわかつた。

店にいて、葉子に呼ばればいつも同じように笑つて振り向いたが、普段は彼の視線が知らぬ顔の葉子を追つていくということはない。店に来て坐つている風情は、他にいくところがなくして時間つぶしに來はしたが、來れば來たでいかにも所在ないという感じだった。

氣のおけそうな客で、他に客があれば彰子もそっちを選んだが、時たま他に客がおらず、女たちの方が空いていると、葉子は先輩ぶつて気鬱な自分の客を彰子に押しつけた。ダイスをやればやつたで、カードをやればカードで、彰子が倦きたというまで殆んどきりなく石垣は同じゲームをくり返す。といって熱中している様子はさらないのだ。

「あなた、面白いの」

横で葉子が言うと、顔を上げ例の笑顔で笑う。

遊びを止め、代りのおしゃべりで彰子が訊ねれば、訊ねられただけのことについては答えた。答える口調は決して鈍くもなく、淡々として言葉は短い。ただ一度、彰子が話

ついでにいつか葉子が言っていた彼の戦歴について訊ねると、その時だけ、表情を変え、ふいと横を向いた。

客が横を向いた話避けるのがその道の商売の要領であるくらいは承知しているから彰子も黙った。黙りながら、以前葉子が彼について言った戦争ばけという言葉を改めて思い出した。

暫くして、石垣が例の通り現われて帰った後看板に間近く、馴染みに連れられて来た客が、話のついでに石垣と同じ会社とわかった。

石垣が常連と告げる葉子に、

「へえ、あの男でもバーへ来るのかね」

相手は真顔で驚いて見せた。

近しい仲の、しかもその場にいない人間の噂がバーでは何より酒の肴となる。彰子も割って入って石垣の噂を訊ねたが、昼間毎日同じところで机を並べている同僚の告げたことも、大方彼女たちが店で殆んど毎夜黙りこくっている彼を見て感じたものと大差はなかった。

ただ、

「あ奴はあれで優秀だったんだぜ。いや、今でも仕事じゃ切れるけどな。俺は大学でも先輩だからわかるが、昔からちょっと変わったところはあったが、戦争ですっかり変って

帰ったなあ。運が悪く悪いところばかり歩かされて、心身ともに小突き回されたんだろう」

「それで戦争ばけ？」

「いや、ばけちゃんないよ。変ったただけだ。結婚でもすりや直るんだらうにな」

とりなすように客はいった。

「あれからあなたが帰った後、松下さんが来たわ」

昨夜の同じ会社と言う客の名を言うと、

「そうかい」

ちょっと眉をひそめて頷いただけだった。

「結婚すれば直るってよ。早くなさいよ」

横で言う葉子へ、

「なにが？」

笑って訊いた。

問い返されつまった葉子は、

「ねえ」

と彰子へ相談を求めてむこうを向いた。

「なにがだい？」

「つまりよ、あなたがそんなふうにいつも塞いでいるのがよ」

「僕は、塞いじゃないよ」

無表情に言った。

「そうかしらん。でもそう見えるわよ」

「ただ、つまんないだけだ」

ぽつんと言った。言葉の気配は子供っぽく、その年齢の男におよそ似つかわしくなかったが、かえって本気に聞こえた。

「どうしてつまんないのよ」

「誰も、いないものな」

「戦争で、みんな死んだから？」

答えず黙って彰子を見た。

「そんなのおかしいわよ。いっぱいいるじゃないの、人は」

またはにかんだように笑い、

「でもなあ」

その時、彰子は感覚的にこの男がわかったと思ったのだ。彼女が石垣について何かを理解したとはっきり思ったのは、後にもさきにもその時だけだったかもしれない。

「でも、それはみんな同じじゃないの」

言いながら彰子は自分が彼に対してひどく無責任な口調で言うのを感じていた。

その時の会話がきっかけでどうやら忘れかかっていた大

滝との出来事をくくるめて、とりとめない身の上話をする相手を彰子は見つけたと言える。

いつも彼は黙って熱心に聞いていた。一度、

「君は女優さんだったのか」

感心したように言った。それまで何度となく顔を合わしていたが知らずにいたのは粗こつな話だと思ったが、彼らしいと思える。しかし彼はいつもひき込まれたように熱心に彰子のお饒舌りを聞いていた。彼女はいつもいい気持で一人話した。

殆んどの人間が知らぬ宝塚という世界の内幕には、石垣も乗りだし、彼の方から何かと訊ねたりまでした。

「馬鹿に熱心ね。何を話しているの」

うしろで葉子が口を入れたりしたが、彰子は自分がこの店でいわば開かずの間だった石垣をこんな具合にひき込んでみせたことに一寸得意でもあった。

しまいに石垣は声をたてて笑ったりもした。彼の笑い声に、うしろで店の連中がみんなふり返り顔を見合わせあっているのが彰子にはわかった。そんな気配に石垣の眼を振り向かせぬよう、彰子は話に輪をかけて大袈裟なものにしてみせたりしたのだ。店で新米の自分が先輩である葉子たちに挑戦するような気持で。